

「蒼然たる古鐘」にふれた歌人——長塚節

平成22年1月、九州国立博物館で「兄弟鐘」と呼ばれる二つの銅鐘が、並んでその音を響かせたことをご記憶の方もいらつしやるかと思ひます。一つは京都妙心寺に伝わる鐘、もう一つは、ここ太宰府の観世音寺に伝わる鐘で、共に飛鳥時代、北部九州で作られたと考えられています。この兄弟鐘の共演に際し、鐘の音色の科学的分析も行われました。

太宰府にお住まいの皆さんにとって、国宝といえども観世音寺の鐘といえは、親しみ深い感じがするのではないでしょうか。しかしその形や音の鑑賞はできても、感触を味わうことはま



半前、喉頭結核の治療のため九大病院で診察を受けていた時のこと。彼はそれまでも7回観世音寺を訪れており、老朽化したお堂に安置される頼まれな仏像たちを堪能していました。住職とはすつかり馴染みになっていた様子で、頼めば鐘を撞いて聞かせてくれることもあつたようです。

大正3(1914)年11月下旬、長塚は治療の合間に「宰府より間道をつたい」観世音寺に詣でます。その道中の情景。

稲扱くとすてたる藁
に霜ふりて 梢の柿
は赤くなりにつけり

そして観世音寺に到着。

「彼の蒼然たる古鐘をあふぐ、ことしはまだはじめてなり」。一年も終わりに近づいた頃、ようやく鐘に会うことができ、挨拶のつもりかそつと手を伸べ、爪で軽く小突いてみました。

手をあてて鐘はたふとき冷たさに 爪叩き聴くそのかそけきを

観世音寺の鐘は、この時の彼にどんな響きで応じたのでしょうか。

市史資料室 藤田理子

彼は茨城県の豪農の出で、21歳の頃正岡子規に師事、後に雑誌『馬酔木』、『アララギ』等の同人となります。長塚は大の旅行好きであつたらしく、療養中も病身とは思えないほどの行程を旅しています。彼が観世音寺を訪れ、歌を詠んだのは36歳で亡くなるおよそ2カ月